ぶ ら り わ が 街 宮 沢 界 隈

⑮　路傍にたたずむ石仏ー庚申（こうしん）塔・馬頭観音（ばとうかんのん）

庚申塔ー庚申とは干支（かんし＝えと）のひとつで「かのえさる」とも読むこの干支は60日で一回りする。ところが、この60日に一度回つてくる庚申の日は、昼夜眠らないで過ごせば長生きができるという、中国の道教の思想に基づく教えにより、古来より特別の日として仲間（講員）が徹夜して寄り合い、酒食の会を開く風習があり、はじめは宮廷社会から次第に一般化し、庶民の間にも広まり、「庚申待（まち）」、「庚申講（こう）」という信仰行事となり、供養塔の造立も盛んに行われるようになった。昭島市域で17基の塔が確認されています。

宮沢界隈の主な庚申塔

① 観音寺境内（大神町3-6-5）ー市域最古の塔。元東勝庵の墓地入口にあった、元禄7年（1694）10月造立、像塔、舟型、やさしげな顔の青銅金剛（修験道信仰）・日月・足元には「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿（日吉山王権限信仰）等。銘文等は、庚申供養、大神村

② 昭島消防団第二分団敷地内（宮沢町2－30）ー大正8年（1919）9月造立、文字塔、山型「庚申塔」、銘文等は、願主田村金十郎。北上川原及砂川方面、両立川停車場道、西大神及拝島方面一道標の役割を兼ねて、道中安全祈願もこめられ造立されたものであろう。

馬頭観音ー「馬頭尊（ばとうそん）」とか「馬頭さま」とか呼ばれて、古来より親しまれ、市域でも多く21基が確認されているが、観世音像は少なく文字塔がほとんどです。観音は、人間のあらゆる苦悩に応じて、様々な姿に変化（へんげ）して人々を救ってくれる仏さまとされ、古来より信仰を集めていた。馬頭観音のその形相は頭上に馬頭を戴き、顔はまことに恐ろしい相（忿怒相（ふんぬそう））をした、見るからに恐ろしく表現されていたので、長い間あまり庶民信仰の対象とならなかった。しかし、江戸時代中期の頃から馬は、農作業の労力源であり、副業で馬を引き「駄賃稼（だちんかせぎ）」に活躍し、生活の糧（かて）を得てくれる収益源である馬の無病息災祈願や、死馬の供養のための守り本尊として考えられるようになった。さらに、馬が交通手段であり道中安全の願いもこめるようになり盛んになった。

宮沢界隈の主な馬頭観音

③ 小峰氏宅内（大神町4－16）ー市域最古の塔で、落剥して姿は良くわからなくなっている。宝永3年（1706）5月造立、舟型像塔、一面二臂（ぴ）浮彫、銘文等は、施主大神村中村氏

④ 中神林地区三叉路（さんさろ）（朝日町3－1）ー「林の馬頭尊」慶応4年（1868）正月造立、自然石文字塔、「馬頭尊」銘文等は、中神世話人・馬持中. 一中神駅の南、中神村と砂川二番を結ぶ「大山道」（大宮一所沢一中神ー八王子一橋本一大山）道筋の三叉路にあり、馬の休憩場所でもあった。この地域は「林」という集落で、安政6年（1859）の多摩川大洪水の時に流失された中神村の田中地域の住民が移住した所で、当時、20頭の馬を飼育していたので、馬頭尊を建て、馬の守護と、村の安泰、道中の安全を祈願したといわれている。

記　　防犯宮沢支部会計　西山　禎一

①

②

③

④

大神町小峰宅内の馬頭観音